クルーズ船の誘致でみなとに賑わいを

特集

クルーズの寄港地として人気の小樽。真夏の訪れとともに国内外のクルーズ船客が、市内散策や買物など様々なスタイルで小樽を楽しんでいる姿を見かけます。

今号では、小樽へのクルーズ船入港状況や他港の動き等から、クルーズ船寄港による地域振興について考えます。

▼クルーズ船寄港実績

今年、小樽港には21隻のクルーズ船の寄港が予定されています。小樽は、今ではクルーズ形態の一つとして定着している、飛行機と船を組み合わせた「フライ&クルーズ」を初めて実施するなど、クルーズ寄港地としての実績を重ね、この10年間、平均して年間20隻以上のクルーズ船が入港し、道内の主要な寄港地となっています。（図1）

▼クルーズ船誘致・受入の取組

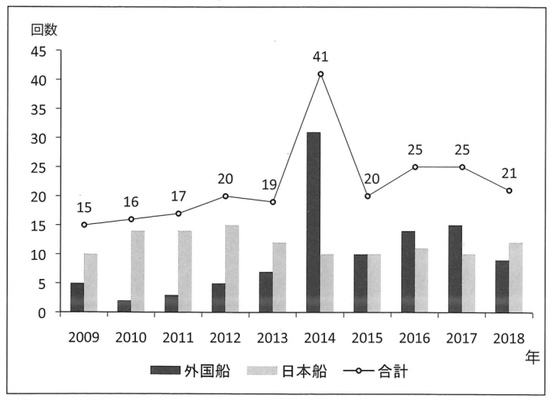
小樽では、クルーズ船の誘致や受入に向けて、官民が連携して様々な取り組みを行っています。

2013年に設立された「小樽港クルーズ推進協議会」（小樽市、当所他関係団体等で構成）では、国内外のクルーズ船社や代理店、旅行業者を訪問し、小樽や北後志エリアの魅力を発信し、旅行商品化に向けて活動しているほか、クルーズ展示会で小樽港をPR、誘致に取り組んでいます。

～おもてなし～

クルーズ船客からは、地元の人たちによる温かい歓送迎や交流が大変喜ばれています。入港時は市民等が会員の「小樽クルーズ客船歓迎クラブ」が出迎え、岸壁での物産販売や案内デスク設置などのおもてなしを行っているほか、出港時には潮太鼓やタヒチアンダンスによる見送りを行っています。

また、商店街でもクルーズ船客を歓迎する取り組みが行われています。小樽堺町通り商店街では、今年から、クルーズ船寄港日に合わせて「Welcome・○○○（船名）」を書いた『ウェルカムボード』を店頭に掲げ、商店街挙げて歓迎ムードを高めています。



【図1】小樽港のクルーズ船寄港回数（2018年は予定数）

物産販売

観光案内デスク

～接岸改良工事～

クルーズ船は、主に小樽港の勝納ふ頭と第3号ふ頭を使用していますが、現在、国の直轄事業として第3号ふ頭に13万トン級のクルーズ船が接岸できるよう、岸壁改良、水深の増深化工事を行っており、早期の供用開始が期待されています。

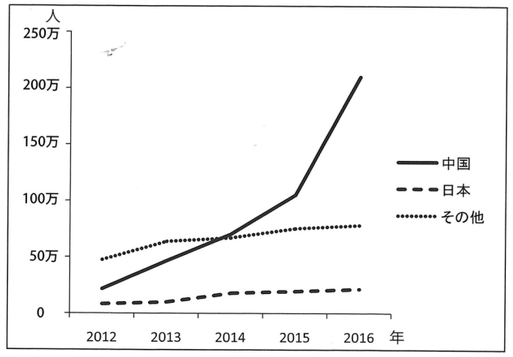
▼世界のクルーズ人口

国土交通省海事局によると、世界のクルーズ人口は、2016年現在、約2,500万人で、その8割をアメリカ（54%）と欧州（26%）が占めています。最近は、特にアジアの増加が顕著で、2012年に約77万人だったクルーズ人口が約4倍の310万人に急増しています。

中でも、中国の伸びが大きく、2012年比で約10倍の210万人に増加し、アジア全体の約7割を占めています。こうした状況から大手運航会社が集中して配船するなど、世界のクルーズ産業に大きな影響を与えています。（図2）

最新の統計では、日本のクルーズ人口は、2017年現在、約31・5万人で、2012年比で約4倍となっています。

小樽堺町通り商店街の店頭に掲げられる「ウェルカムボード」



【図2】アジアのクルーズ人口の推移

▼クルーズの魅力は「楽」「安心」「自由」

クルーズの魅力は、「楽」「安心」「自由」と言われています。客室に荷物を置いたまま自宅感覚で寄港地観光ができる「楽」であること、〝クルーズ＝高価な旅〟と思われがちですが、ホテル代、食事代、移動費、エンターテイメント費用がすべて含まれており、船内で費用がかからないほか、バリアフリーでセキュリティーも充実し「安心」であること、さらに、船内プログラムも豊富で、自分の好みや体調に合わせて楽しむことができる「自由」であることから、年々クルーズへの人気が高まっています。

▼北海道へのクルーズの特徴

北海道へのクルーズ船は、従来、日本船による夏場の観光が中心で、外国船は主に北方海域の探検や北太平洋を横断する途中に小樽に寄港していました。しかし、2012年頃から北海道観光を目的とした外国クルーズ船が増え始め、2014年には小樽港を起終点として、一定エリアを周遊する「定期・定点クルーズ」が行われ、